

結桶師と結桶のもたらした革命

『職人尽絵』（埼玉県 喜多院蔵）
 『社会科 中学生の歴史』p.71掲載

職人たちの時代 中世には「職人歌合」と呼ばれる絵画作品がつくられた。職人が左右に分かれて和歌の勝ち負けを競う、という趣向である。この職人歌合の誕生は、中世後期における手工業の発達とその担い手である職人たちの増加を物語っている。室町時代になると『三十一番職人歌合』がつくられ、62もの職種の職人が登場する。そして、16世紀初め（戦国時代）の『七十一番職人歌合』では142職種の職人たちが描かれている。中世後期（室町時代と戦国時代）は、職人の職種が急激に増加し、多種多様な職人が登場した時代である。その流れの到達点が、近世（江戸時代）なのであった。元禄3（1690）年に刊行された『人倫訓蒙図彙』には、実に460種を超える職種が登場するにいたる。

結桶師と結桶の登場 そうした職人のなかでとりわけ重要な歴史的役割を担ったのは、結桶師（桶屋）であった。彼らの姿は『三十二番職人歌合』（15世紀）に登場し、喜多院の『職人尽絵』にも描かれる。この図では、桶屋が畳屋の店先で結桶を直している。坐っているのは畳屋の妻と子どもである。桶屋の仕事ぶりを見ながら、左手をあげて話しかけている。その脇から赤い前垂れの女が、水の入った結桶を持ってきている。この結桶も直してもらいたいのだろう。16世紀中頃の京を描いた国宝『上杉本洛中洛外図屏風』にも登場する。結桶師は、中世後期に現われた代表的な職人なのであった。

結桶は、短冊状の板を箍（おもとに竹製）で締めてつくった容器である。とても頑丈で、従来の曲げ物の桶と比べてはるかに重量のある液体を運ぶことができた。中国で生まれた結桶は、北九州では12世紀の発掘現場から見つかっている。中国の貿易商人が用いていた物であろう。日本社会では、13世紀後半から14世紀にかけての絵巻物に結桶が描かれるようになる。つまり、結桶師と呼ばれる職人が日本に生まれ、さまざまな結桶をつくるようになった。そして室町時代以降に、急速に普及していったのであった。

結桶の革命 結桶は、生活と生産のあらゆる場面で役立つ有用な容器となった。手桶・洗い桶・水桶・漬物

「伊丹酒造」（『日本山海名産図会』より）

桶・味噌桶や井戸側・釣瓶・風呂桶・盥などの生活用具であり、酒・醤油・柿渋などの貯蔵・運搬手段であり、酒・醤油・味噌・酢などの醸造手段であった。歴史的に重要な例を挙げると、一つは、液肥（人糞尿）の施肥の普及である。結桶の肥桶ができてはじめて、人糞尿施肥が本格的に普及していったと考えられる（『社会科 中学生の歴史』p.70）。二つ目は、結桶製造の技術的発達によって大型の結桶（仕込桶）がつくられるようになり、酒造業に一大飛躍がもたらされていくのである。『多聞院日記』天正10（1582）年正月三日条には、若い尼が誤って十石入りの仕込桶に落ちて死んでしまったという記事がある。つまり奈良では、結桶の大型化と酒の大量生産が始まっていたことがわかるのだ。甕・壺を容器とする酒造りから、大型の結桶を仕込桶とする大量生産の酒造業への転換である。一種の生産技術の革命的進歩であろう。

都市と農村をまわる桶屋 結桶は、使い捨てではなかった。ゆるんだ箍を締め直して再生された。結桶師つまり桶屋は、都市と農村をまわって結桶の修理をした。中世後期と近世の社会で、ごく普通に見かける職人になったのであった。「風が吹けば桶屋が儲かる」ということわざが生れたのも、その屁理屈はともかくとして、彼らがとてもポピュラーな存在であったことを明瞭に物語っている。戦後の一時期まで残っていた子どもの遊びに箍回しがあった。使用済みの箍を回して遊ぶ子どもたちの姿も、近世から近現代までの日本ではごく普通に見られた光景であった。

近世の醸造業と運輸業の飛躍 近世になると、結桶や結樽は醸造業と運輸業において大きな役割を果たす。三十石入りの仕込桶もできて、酒の大量生産がなされるようになる。江戸をはじめとする全国の消費地には、酒は頑丈な結樽に詰められて海上輸送された。こうして灘や伊丹などの酒造業が勃興していったのである。

（東京大学名誉教授 黒田日出男）